明治四十五年五月一日納本發行（毎月一回一日發行）
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子

第九巻第五號

目次

○思想の巡禮（一）……小橋三四子
○現代の母親（五）……文學博士 中島力造
○世界一週の感（七）……植村正久
○聖者の婦人觀（九）……宮川經輝
○社會改良と子供（一六）……安部磯雄
○思ひ出（二〇）……白井胤祿
○學生休養室（二四）……記者
○隨感（二七）……吉田梅子
○默示錄の基督（二九）……柏井園
○イエシュダス（三三）……小此木松子譯

日本基督教女子青年會發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子　第九巻第五號　（明治四十五年五月一日）

思想の巡禮

小橋三四子

○本誌文苑欄に小此木氏の譯出せられたるイエシュダスは、現に英國の某神學校々長にして、また作家として知られたるスモール女史の創作であります。背景を印度に取り、婆羅門僧侶の家に生れたる一子ナラヤン、ラオが、迷信の宗教より逃れて、遂に眞の救世主を見出し、周圍の迫害をものともせず、傳道の爲めに一身を犧牲に供するといふ梗概でありますが、普通の宗教小説と違つて、極めて暗示に富んだものであります。就て見らるゝ樣、ラオの父母及び幼き可憐の妻は巡禮に出てゝ諸國の寺を詣でし時御手洗の水を飲みしが原因にて、遂に恐ろしき疫病の爲め、一時にその命を奪はれ、大なる家に只一人取り殘されたるラオは、心の痛みをいかにして醫すべきかを知らず、氣も狂はん斗りに煩悶せる時、ふと世に一人の救世主ありと心の底に響くものがあつた。よくよく思ふとそは幼き折姉の婚緣の席にて餘興に見し宣教師の眞似事といふに行はれしイエシュの一生が心に刻まれて居るのであつたが勿論その名さへ忘れ果てゝ居つた。そこで彼れは日夜救世主を求むるの餘り、荒れ果てたる草原を開きて、馴れぬ手に殿堂を建て、久しく祈願を籠めたが、少しく心の落ち付くと共に、拜すべき神なき空虛の殿堂の厭はしくなり、遂に息ひなき心を抱いて巡禮に出かくるのであります。この篇中に於ても此處は殊に我々の見聞する現今の青年男女に思ひ合はされて、深き感慨を以て、讀まれる事で御座います。

○現今の青年男女の多くは、息ひなき心を抱き、何物かを求めてさ迷つて居る巡禮であります。家庭に於ては殆ど無宗教に生ひ立ち、やがて成長して學ぶに從ひ、さま〴〵の思想を抱ける敎師より、殆ど時

間毎に異れる說を耳に致すものであります。未熟なる青年の頭に於ては、到底これ等の說を消化する事能はず、朝に立てし主義は夕に碎かれて、徒らに懷疑に陷るのみであります。かやうの人々は宗教に就き、何の素養もなき時、既に早くも佛教は迷信なりクリスト教は淺薄にして取るに足らずとの先入觀念に心驕りて、經典を手にせず、聖書を繙かざる者が多いのであります。また或一派の人は佛教にも、クリスト教にも、何れの宗教にも長短あれば、我れ等はその短所を捨て、長所のみを取つて我れ等の宗教を作らなければならぬと申します。この說程、常識に訴へて都合よきものはないでありませう、しかも若しその長所のみを取つて一つの宗教を組み立て得らるゝとしても、淺墓なる自らの智惠によりて造り出したる小さき神の前に、どうして膝づく事が出來ませうか。

○

われ等は全智全能の神を人間に示し給ひしクリストを通したるクリスト教を信ずる者にして、われ等の生涯がいかに長壽を許さるゝとも、なほ完全のクリストの人格に全く倣ふ事能はざるを思ふ者であります。クリスト教は決して理論にあらずして、生きたる手本を以て、われ等を低きより高きに導き惡より善に變らしむる力あるものであります。解剖學を修めたる學者必ずしも身體の健康を增進せしめ能ふものにあらず、宗教を批判しつゝ、宗教の生命を受けんことは、恐らく望んで得られぬ事でありませう。自分は年々に人格を通すといふ事に、誠に深き意味を見出すやうになりました。或時はいづこに行つたならば、自分の心にしつくりと合ふ說を聞かれるであらうか、必ずそは新らしき說にあるであらうと、餓え渴く如く新らしき說を求めて聞いたものであります。然し新らしいといふ言葉は、誠につまらなきものであると、遂には悟りました。穴倉より取り出しても、人の耳目に遠ざかつて居れば、新らしく聞えるのであります。誠に立派に聞える說も、もし實際に行つて見れば、矛盾だらけであつた時には、そは眞實を缺いた思想の遊戲であります。われ等は眞正に生きんことを希ふが故に、その生命の體を求むるのであります。此に於てか十字架にかゝる迄、一つの主義を貫き、その身を殺して神の御旨を表はしたるクリストを再び新らたなる尊敬を以て仰

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぐに至りました。自分はまだ人に向つて何等を說く事も出來ない極めて未熟の者であります。然し神の御許に立ち歸り、日々神と共に住ふ喜びは、いまだ經驗なき人々に一人でも多く、また一刻でも早く知らしめたいと希ふ心は切であります。そこで何故に現代の青年の迷ふ者多きかを、狹き經驗にて思ひ當りし丈けを述べて、其障害を取り除く爲めの幾分の助けとなり、早く神を見出さるゝ道に立ち至る事が出來れば誠に之に過ぎたる喜びはありませぬと大膽にも此處にかやうに書かうと思立たのであります。

○

それには先づ第一に宗教なき人の宗教を說かぬ事を希ふと共に、また宗教なき人より宗教を聞かんとする者を戒めたいのであります。宗教なき人といふには二種ありませう。一つは全く宗教の味を知らぬ人にて、たとへ理論に於てはいかに巧者に、また批判はいかに徹底して居つても、自ら神を拜したる事なく、祈禱の樂しみをも知らぬ人であります。今一種の人は、自分は嘗て熱心なる信者であつたが、それては決して進んだ智識を抱ける人が、滿足して行かれるものではないと云ふ人であります。これほど若き人々を迷はするものはありません。彼れ等は僅かなる智識や事業の爲めに、その信仰を失つた者であります、一日一日と神より遠ざかつて、その愛を忘れた者であります。かやうな人に問ひたい事は、「神は愛なり」といふ一事をさへ、全く行ひ盡せしかと申す事であります。その一事をさへ行へずしてその宗教に滿足する事を得ずと云ふは、智識進みしにあらずして、反逆の心に誘はれ遂に敗戰したる者であります。敗軍の將は軍を語らずと云ふ事を聞きました。誠に沈默することそ、却つてその人の價値はあるのであります。然しまたいかに未熟なる青年も、宗教なき人より宗教を聞かんとして居るといふ自分の態度に氣付きし時は、決然起つてその誘惑から免かるゝ事が出來るのであります。

○

次には宗教を學べと申す事であります。本誌にも屢々その信仰に入りし道に就て語られたる廣岡淺子夫人が申されますのに、祈禱と云ふ事も初めには無理に勉めなければ決して祈る事を覺えらるゝものではない、一と度祈禱の喜びを覺えた者は、それは日ゝの糧の如く、日夜決して祈らずに居らるゝもので

はないと申されました。宗教も亦謙遜に學ぶといふ事がなければ、幾年その必要を稱へたからとて、決してその生活に入らるゝものではないと信じます。クリスト教には聖書といふ善き書物があります。何人も始めは廢れたる文學でも讀むやうに馬鹿らしく思はれるものです。然し一と度善く研究を重ねたる人々より、註釋と共にこれを聞く時は、古くしていつも新らしき泉の如き眞理に接する事が出來ます。或人が申しますには、自分が或る疑問を抱いて、聖書を繙けば、必ず何事でも適當の答へが與へらるゝと。誠に驚くべき書物である事は、奥深く學べば學ぶ程知らるゝ所であります。

○

次には日曜學校の効果を殊に家庭にお知らせしたいのであります。人の親としてその子の行末の幸を祈らぬ者はありませぬ。しかも、或る時期に達すれば、羊を狼の群れに放つが如き思ひしても、親の許から手放さねばなりません。然し手放す時いかほど心を痛めても甲斐のない事であります。その子が家庭にある間、育られたる空氣は血となり、骨となつて、深く遠く、人の一生を支配する者であります。聖オーガスチンがさま〴〵の思想や誘惑に陷りつゝも、再び、神の御許に立ち歸りしは、かの信仰深き母モニカの膝にありて聞きし祈りや、神の教へが、なほ磁力を失はないで居つたからでありませう今の日本の家庭では、信仰ある父母を持てる者はまだ少くあります、わが子に信仰を與へやうとならば親たる者が先づこれを身に行ふの人でなければなりません。然し至らぬ親の信仰を助けて、幼き間に神を知らしむるに與つて力あるのは、日曜學校であります。長じてわが信仰を見出す時いかに、煩悶致しませうとも、常に確たる中心にその心を引く力あるものは、實に幼き心に蒔かれたる神の教へである事は經驗ある人の點頭き能ふ所でありませう。

○

昔の人が「空地をあるを見出す毎に檞種子一つづゝでも蒔け」と申しました。私はこの言葉を大層好みます。私の經驗は檞種子一粒にも値せぬかも知れません。けれども土地を與へられ蒔く事を許されました儘に喜んで蒔き、日光と露の惠みを以て育て給ふ神は、萬事を善きに用ひ給ふ事を信じて、之れにお任かせする次第であります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現代の母たる者

（青年の思想變遷に際し母親の執るべき態度）

文學博士　中島力造　談

（一）青年の個性を發達せしめよ

中々攻究を要する大問題で、輕々しく御答へをするに躊躇致しますが、試みに思ひ浮んだ要點を掻い摘んで申上げますれば、先づ第一に今日の母親としては、それ〜〜青年個人の性情をよく見究めて、之を有爲善良に發達せしめるのが必要と思ひます。成程今日の青年は多少生意氣になつたやうな傾もあります。然し之は時勢の然らしむる所でありますから無暗に昔流義に壓へ付けるといふのでなくて成るたけ之を利導するといふことが肝要と存じます。何故かといふに今日の青年には、將來我が國家を脊負ふて立つといふ精神覺悟を十分に持たしめねばならぬのでありますから、第一に人格といふものを重んぜしめ、從て民として享有したる權利を了解して、之を尊重せしめ、少時より自重心といふものを養成せしむる必要があります。これ等の必要より、母親としての態度も自然昔流とは趣を異にせねばならぬのでありまして唯だ其の手心といふものが大にむづかしいのであります。之は一々細かに申上ぐることは今回は御免を蒙りまして、其れ等手心として、私は二三母親の心得べき點を申して見ませう。

（二）青年の放縱を檢束せよ。

前に申しましたやうに、今日は青年の個性を發達せしめる必要がありますが、然し母親として之を十分に監督し指導する所がなくては、反て青年の將來を誤まる結果に陷ります。何故といふに元來青年時代は、思慮淺く、客氣に馳せ易いのでありますから餘りに其の爲す儘に放任しますときには、自由といふことを我儘と間違へたり、獨立といふことを親の意見に反することとのやうに誤解して、隨分兩親に心

配をかくる厄介者となる虞れがあるからであります。

申すまでもなく、勅語にも智を啓發し、德器を成就せよと仰せられてあります通り、青年期は此の修養を爲すに最も肝要な時であります。されば母親としては、其の子女を戒めて放縱遊惰に陥らぬやうに、其の心身を律せしめ、其の智識才能を增すと共に、品行性格の十分見上ぐべき好紳士として發達せしめるやうに導かねばならぬことは、これ實に母親の責任であります。

（三）少年期より習慣性を作れ

然し子女が青年期に達して後に、監督指導するといふことは、既に遲蒔であります。それで少年期より十分に母親が注意して善良なる習慣性を作らしめるといふことが大切であります。古語にも「習慣は第二の天性なり」と申しまする通り、十分注意して監督指導し、時勢に副ふて子女の個性を發達せしめましたならば、將來には一廉社會に立つて間に合ふ所の特性を發揮せしめることが出來ると信じます。それには幼時より家庭に於ける教養を怠つてはなりませぬ。

（四）先づ母親自身に修養せよ

所でかく青年をして善良有爲なる發達を成さしめるといふには、私は母親自身も修養を怠つてはならぬと思ふのであります。此の事は中々言ふに易くして行ふに難いことではありますが、勉めてさういふ風に母親たる者が覺悟されて居るといふことは、今日の時勢では誠に必要の事かと思ひます。唯だ家庭の細事のみに追はれて所謂高等下女と擇ぶ所がないのでは、決して己が子女をして、前に申したやうな發達を成し遂げしむることは不可能であります。それでせめては母親は、時勢に後れぬだけの知識を養ひ、又子女の監督者たるだけの德操は有つて居らねばなりません。母親自身が學問などは全く投げ遣りにして、娛樂のため遊び廻るとか、社會事業に熱中して外出のみして、居るといふ風では、迚も前條の目的を達することは出來ません。

（五）今日の所謂良妻賢母

そこで私の思ひますには、今日の所謂良妻賢母は何事も從順で、家政の細事にのみ長じて居るのでは足らぬと思ひます。之も勿論必要でありますが、之と同時に其の青年子女をして將來十分有爲の發達をなさしめるやうに、指導監督するだけの資格を有し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の價値を示すやうにせねばならぬと思ひます、所謂其の家庭をして大に從來に光輝を放たしめるといふことも、母親として其の一部を負擔すべきものであらうと存します。

要するに母親にして、これだけの覺悟を有することは、刻下甚だ必要なことゝ存じます。兎角今日は西洋より諸種の主義思想が入り込みまして、青年の思想は之が爲に動搖し易いのでありますから、所謂子を持つ親の心配は一通りではありません。之を生意氣にならぬやう、然し奮發心のない依賴主義の青年とならしめぬやうに、健全なる發達をなさしむるといふことは、頗る困難なることであると存じます然し最早明治四十五年で、新舊思想の衝突などゝいふことも、これからの家庭には段々減つて行きませうから、今後の母親たる者は夫婦心を合せて十分子女の敎養に力を盡さねばならぬことゝ存じます。

（文責記者にあり）

世界一周の感

植村正久

○米國を通行した時には、多くの日本人と同じく米國婦人の風俗擧動等に多少飽き足らず思ふた事もある。癪に障つた事もあるが、然し大西洋を越えて英國に行き殊に歐大陸に行つた後には非常に米國婦人がよく見える樣になつた。依然感化せぬ點は殘つて居るが、然しその中に尊敬すべき資格を認める樣になつた。勿論此處に委しく述べる事は出來ないが、要するに米國、英國、歐大陸の婦人を一口に云ふて見ると次の如き事になるかと思ふ。

○米國の婦人は女子青年會の幹事、又は敎師のやうで、智識に富み、擧動も活潑でしやん／＼して居る英國の婦人は奥樣のやうである。獨逸の婦人は料理屋、宿屋の仲居のやうであると、斯くの如き區別をすれば、一番その特徴が分る。何れも長短はあるが最も嫌に感じたのは、宿屋の仲居である。且つ歐大陸に於て最も感情を害したのは、多くの婦人が汽車

の中でシガレットを吹かしたり、甚だしきは禁烟室でも委細構はず、紳士の前に吸ひからしを吐き散らしたりする事である。船中でも舞踏室で或獨逸紳士（領事である）夫人が、シガレットを無遠慮に吹かしたのみならず、男女の交際にも品格が下がつて居る樣である。余は船中でシンガポールに來る迄は、同船の獨逸人、和蘭人に向つて攻撃を浴せた。

○シンガポールに來るとサア往生、三等室でも、それ以上の船室にも多くの日本婦人が入り込んで來たこれ等の多くは此處に云ふ事を憚る身柄の人等であるから、殆ど爲樣がないが、甲板でシガレットを平氣で吸つて居る。それから歐の婦人に一言も出ない樣になつた。どうか日本の婦人にはあゝいふ習慣がひどくならぬ間に止めたいものである。それには海外に旅行する婦人の職業に注意して、卑しいものは勿論やらぬ事にするがよろしい。かういふ點は女子青年會等で何とか盡力して貰らひ度いものである。

聖者の婦人觀

（彼得前書第三章四節）

宮川經輝

△男子の婦人觀

今日までのところにては、御婦人が同性の事を何う云ふやうに見て居らるゝか、婦人の婦人觀なるものを餘り聞た事がない、多くは男子の婦女觀である私は餘り小說を讀まない流儀であるから、小說の上に現はれた婦人觀は知らない、餘りに喧しく人々が申すから、昨年の暮イブセンの「人形の家」の英譯を購ふて一應之を讀んだ事がある、其他には彼の英國のウオルド女史が書かれた「亞米利加人の結婚狀態」と云ふ小說、是は突飛なる米國婦人が歐羅巴の貧乏貴族と結婚をなしそして取返しの付かないこと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゝなる狀態を描いて大いに戒めたものである。三四年前に一寸太平洋沿岸を旅行した頃に、市俄古大學の教授でウイリヤム、アイ、トマスと云ふ方が「女性と社會」と云ふ書を出版し、大に亞米利加婦人の激昂を招いた事があつた。多少問題となつた書物であるから是を買ふて、船中で讀んで見た、當今は書物にはないかも知れないが英國では女子が參政權を得たいと云ふので非常なる戰ひをやつて居る、先達ては倫敦の女子大學では其問題に就て討論會もあつたと云ふ、何うも今日の勢ひでは非參政權を主張するところの婦人達の議論が何うやら論理には叶つて居ると云ふ評判であるけれども、女子の參政權と云ふ事に就ては、アスキス內閣の大臣中でも其人ありと知られたる外務大臣エドワードグレーの如き、又大藏大臣ロイドジヨージの如きも贊成して居るやうな事である、或は物になるか知れない。兎も角現代は女子を何う云ふやうに取扱はうか、又婦人自らも今までのやうな狀態で人形として取扱はれる事は好まない、眼の醒めた婦人、即ち男子と共に社會に立つところの婦人として取扱はれたいと云ふ要求を有つて居るから追々此問題は深く考へられて、遂には女子方が希望するやうな自由の天地も開ける事であらうと思ふ。

△古聖の婦人觀

玆には聖者が婦人達を何う見て居るか、舊約書では彼の雅歌と云ふ歌がある。是はソロモン大王が田舍娘に思ひを寄せて、頻りに之を己かものとしたいと云ふ考へを回らしたけれども、其小女は毅然として操を保ち、遂に大王の意に從はなかつたと云ふ筋書である、之れはイスラエルの小女の貞操の正しき事を謠つたものであつて極めて健全なる戀愛の歌である。今一は路得記である、是は日本人の貞操と云ふ上から見る時には非難すべき書物だが嫁が姑に事へる至誠を描た點に於ては、之れに比肩すべきものは恐らく世界の文學書中多くはあるまい、夫から今一ッは以士帖書である、是れは今私は多く云ふはない、舊約書中で極く簡單であつて而もよく纏まつたものと云へば、先きに朗讀した箴言の三十一章の十節以下である。新約ではキリスト御自身が何う云ふ婦人觀を有つて居らつしやつたか、キリストの語錄を取り合せて見たならば、一種の婦人觀が出來るか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も知れない、けれども何所にも是と云つて纏まつたものは記されてない、夫だけは明白である、併しキリストが婦人方に對せられた其態度其行狀に依つて考へて見ると、矢張りキリストは限りなき命を繼ぐ者又は神の子供として、之をお認めになつてあつたと云ふ事は事實である。婦人問題に就て最も多く云ふて居るのは使徒パウロである。夫は哥林多前書第七章同じく十一章の二節から十七節までに纏まつた議論が載せてある、けれどもパウロは其時代のキリストを信ずる婦人達が餘りに飛上り與へられたる自由を濫用して、男子を凌ぐやうな弊害を生じた所からして、其弊害を矯めやうとして筆を執つたものなれば、決して是は萬世に通じての教とは云へない現代の基督信徒中考ある人々は、パウロの婦人觀は誤つて居る點が多い事を認めて居る。其時代に對しては宜かつた、譬へば女は冠り物を冠らずしては教會には出られない、女は教會にては物を云ては不可い何か尋ねたい事があるならば竊に家に於て尋ぬべしと云ふやうな事、斯ふ云ふ考は其時の教訓としては宜かつたかも知れないが、後の世までも之を守らなくちやァならない教訓とするならば非常なる誤りを生ずる譯である。私の見るところにては今朝私が朗讀した彼得前書の三章の一節から七節まで、所謂ペテロの婦人觀は最も穩健であるばかりではなく、其の婦人觀の奥に潜んで居る思想は極めて深奥なるものである。即ちペテロの婦人觀は穩健にして深奥であつたと申して宜い、蓋し舊新兩約書を通じて聖者の婦人觀としてはペテロのが最も宜いやうに思れる。

△婦人の美徳

今其ペテロの教へらるゝところを御紹介して見たいと思ふ、第一は婦人に對する注文が二ある、一は恐れを以ての操ある行狀と云ふ、若し神を信じない良人を有てる婦人があるとするならば婦人の御說法ではない、其婦人が神を敬ひ恐れて而も其行狀は操の正しい者即ち操ある行狀である、他の事に於ては多少缺點があるにしても、其良人に對しては縱から見ても横から見ても操ある行狀としては少しも非難することのない行狀をするならば、信じない良人も其婦人の德に化せられて、謹んで神の教を受くる者となると云ふ事である。實にペテロは宜いところに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眼を注て、千歳不易の教を示されたものと云はざるを得ない、神を敬ひ恐れて而も其上に良人に對するの操に至つては非難するところのない行狀があつたならば、もう夫て家庭は確かに能く治まる、良人も斯くの如き婦人の前には何うしても頭を低げなければならない事になる。

△婦人の裝飾

何うも女性は裝飾を好むものである、内の方になる小娘でも頭に赤いリボンを縛り付けてやると滿足して嫣然して喜んで居る、美を好むは人の天性である、殊に御婦人に於ては美を好まるゝ事を疑はない本文を一寸讀むと爾曹の裝飾は髮を辮とある、是は縮髮を云ふ、猶太の人や西洋の人は髮を縮らす、貴方々の裝飾は縮髮ではない、又金の飾輪を掛けるのでもない、斯く申したればとて髮を結ふてはならぬと云ふ事でもなければ、櫛や笄を用ゐてはならぬと云ふ意味でもない、そんなものが御婦人の眞實誠心から慕ふべき裝飾ではないと云ふ事を云つたゞけてある。

△心靈の美

然らば最も重きを措くところのものは何かと云へば、此所に心の内の隱たる人即ち壞ることなき貞淑と謹愼なる靈を以て裝飾とすべしと稱してある、御婦人の裝飾は貞淑である。貞淑と云ふは操ある行狀と云ふよりもマア一ツ其奥に踏込んで、赤誠を傾けて良人に仕へると云ふ情操を意味する、行狀だけ操ある人は澤山ある、其心に於ては良人を離れて居ると云ふ事では情操と云へない、心の底から其情が…其心が貞淑になり、滿心の誠意を以て其良人に對すると云ふ事でなくちやアならぬ、穩和と云ふ字を謹愼としたのは何うも意味ある事である、穩和と云へば叩かれても毆られても受身になつて耐えてじッとして居ると云ふ事になる、謹愼と云へば多少同じ意味であるけれども、眼上の人から攪廻されても同等若くは己れ以下の人から邪魔されても夫が爲にピリッともしないことでさる、チヤンと心が締つて如何なる場合に於ても己が心を擾亂されないと云ふ事を意味する、過ぐる日曜日の朝の新聞を手に取つた時に、神戸の女子神學校の教員と生徒が七人軍艦

を見に行つて海に沈んだと云ふ事が書いてあつた。夫から驚いて家内が見舞狀を送つたのである、木曜日に神戸に參つて、其生徒を率ゐて參つた婦人に會ふて何う云ふ風であつたかと尋ねた。船頭は百人に一人しかない有名な人、滅多に船を顚倒すやうな事はない筈の人である、ところが何うか過つてハッと云ふ間もなく顚倒つて、七人共に水中に落ちた其時に誰一人聲を出す者もなかつた、皆默つて顚倒るまゝに水の中へ落ちた、落ちたと思ふと六人はバッと直きに浮き上り五人は自分で船に摑み付いた、一人は新聞にあつたやうに船の下になつて浮んだところが何か上に閊へる、アゝ是りア船の下になつた是ぢやア駄目だと思つて其邊を探すと繩があつたら其繩に摑み付いて、どうせ死ぬのだから取亂した風をしては不可い、寧ろ笑を含んで死にたいと思つてジッと繩に縋つて考へて居つた、さうすると水夫が軍服を着たまゝで飛込んで、さうして其一人を取摑へて上げて吳れた、其助けて吳れた水夫又は之を見て居つた人々が、斯くの如き場合に女性として聲も出さず悶躁もせず、泰然として或は船に取付き或は繩に取付いてジッとして、死の至るを待つと云ふ事は豫て修養のある人でなくては出來ない事である、而して其水夫と云ふのは基督信者であつたが、實は近頃大部信仰が亂れて居つたと云ふ、ところが其婦人達の謹愼なる狀を見た時に、實に基督敎の信仰は活きたものである事を悟つて、夫から其信仰が復活した、水中に落ちた其場合に少しも驚かず、七人が七人微傷さへ負はずして上つて來たと云ふのは實に珍らしい出來事である、其珍らしい出來事が人間の方から云へば即ち穩和である、謹愼であつたと云ふ事が一の原因をなして居る事は疑を容るべき餘地がない、けれども御婦人方の穩和、謹愼と云ふものも、家庭の中が鼎の沸く如く亂れたと云ふやうな時になつて謹愼を失ふて、不心得をいたすか心得違ひをいたすか、或は神經衰弱に陷るかと云ふやうな事になる、家庭問題の紊亂に對して謹愼で過ごし得る婦人はエライものである。

△適　例

夫から今度は一轉して實例を引いて、アブラハムの妻サラの如くなれと云ふ、さうして何を云つて居るか、何事をも恐れずして善を行へ、不善を行ふた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら恐るべき事だ、悪事をいたしたら恐るべき事である、けれども神の聖前に於ては是は善だと知つた事を行ひさへすれば何の恐るゝところがあらう、譬へば自分がキリストを信じやう、神の子供にならうと云ふ時に他の者が何と云つても彼と云つても、人間が當然なすべきの善をなすのだから何も恐るゝところがない、是は今日の御婦人に是非望みたい事柄である、善を行ふ時に始終右を見たり、左を見たり、前を眺めたり脊後を顧みたりして恐れる人がある。夫ては不可い、神の聖前に善と思つたら誰が何と云つても決行ると云ふ風にやつて見られよ反對したところの者も遂には賛成して君のやつたところが善かつた、其時は自分が反對したけれども、是非如彼なくてはならないところてあつたと賛成する。

△男子に對する注文

次にペテロは男子に向つて此所に三つの注文をされた、男子諸君能く聽くべし、第一の注文は七節に夫たる者よ爾曹も妻を遇ふこと弱き器の如くし、とある、女は男子よりも弱いものである、女は劣等な者であると云ふ考を起す人があるか知れない、決してさうぢやアない、九谷焼きか或は價高い瀬戸物を取扱ふやうな考で女を取扱ふ、是は諸君、妻のなかつたパウロは其點までは考へてなかつたかも知れない、妻のあつたペテロには能く分る、御婦人は極めて感情の鋭敏なるものである、其感情を一度破つたならば、もうどんな道理を持つて來てもどんなに筋を立てゝ見ても、情理も理屈も心には這入りやアしない、若し女子が男子に優るところがありとするならば、其情感の鋭敏なる事、若し劣るところがありとするなら又感情の鋭敏過ぎるところであるかも知れない、夫て弱き器の如く之を取扱へと云ふは、男子の方から婦人の情を察し、其要求のあるところを先方が云はない間に此方から其感情を察して、其感情を傷つけないやうにして之を導き、之を助けて行くと云ふ事である、男子なら議論でやりつけるところを女子は議論でやりつけられないところがあるから其情の動くところに隨つてよく舵を取つて、さうして其弱き器を破らないやうに待遇する事である、夫から次の注文は理に循ひて之と共に居ると録してある、何うも男子は世間では隨分理屈を云ふが、家庭に於ては極めて不理屈な事が多い、道理も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

理屈もあつたものぢやアないと云ふやうな工合で、或は、婦人を人形扱ひにし或は獸類扱ひにする事何うしても許すべきではない是と共に理に循つて居るとあるのは家庭に於ても男子は不理屈を云はず、或は詰らない理屈を以て婦人を叩き伏せると云ふやうな事でなしに、其婦人の理のあるところを考へて尤もと云ふところに折合つて行かなければならぬと云ふ意てある、第三の注文は之を敬ふことと生命の恩を嗣者の如くすべし、是は諸君ペテロの婦人觀の絶頂である、男子は限りなく生きる事を希望するものぢやアないか、又限りなく生くべき神の恩をキリストに依つて與へらるゝものぢやアないか、丁度其如く御婦人連も限りなく生くべき希望を持つて居らつしやる、又キリストの恩に依つて限りなく生くべき命を有して居らつしやる、然らば此婦人を限りなく生くべき人格あるものとして敬まはねばならぬ。

△最後の一句

爾曹の祈禱を妨げられざるやうにせよ、本文にはなんぢらの祈禱に阻礙なからん爲なりとある、何う云ふ意味てあらうか、良人と妻は家の二つの柱てある此男女が同棲すると云ふ上に於て一番尊い特權は心を協せて祈ることである、男女が心を協せて祈る時には神共に在す、ところが良人は實にエラもので、隨分立派なる智慧も智識も德もあると思つて居る時に、其婦人は誠に詰らないはしたない女であると斯うしたならば所謂提灯と釣鐘、心を協せて祈る事が出來るか、出來るものではない、又御婦人の方が非常に高尙であつて男子が詰らない者であつたらば、心を協せて祈る事が出來るか、何うしても出來ない、そこで御婦人の方ではペテロの注文通りに恐れを以て操ある行狀をする事と、貞淑と謹愼を以て心の裝飾とする、男子の方では其婦人の情感を破らず、其婦人に對して理を以て向ひ、更に命の恩寵を嗣ぐ者として之を尊敬すると云ふ、イヤさう云ふ尊敬さるべき婦人になつて貰はなくちやアならぬ、男子が低ければ婦人の德に依つて、尊敬を受くべきだけの人になつて貰はなくちやアならぬ、して見ると家庭は修養の場所、良人と妻、妻と良人、此二人が何方が低くゝても不可い、何方が淺くても不可い、高尙深奧なる者になりたいと思つて、或は五年或は七年或は十年或は二十年或は三十年の久しきに亘つて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

互ひに助け合ひ、互ひに注意し合つて磨き養ふて來た曉には、遂には眞個に協せて神の聖前に祈る事が出來るやうになる、

社會改良と子供

安部磯雄

△基督主義の家庭

基督敎の家庭は家族各自の人格を認めて居る。甚だしく云へば誰れも彼れも神樣の前には同樣である。親も子も夫も妻も平等故、誰れが首か誰れが下に屬くか等、上下の區別、權力の相違はない。我が子も我が子ならずして、神の子である。我が妻も我が妻ならずして、神の子であるといふ考へが、基督敎の家庭觀である。それを何處迄當て篏めるかは、基督者の中でも多少異るが、基督者で無いものよりは大體平等の考へを持つて居る。この意味より云へば日本の今迄の家庭組織や制度は、私共には滿足が出來ぬ。家長が獨り絕對權を以て如何なる事をも勝手に振舞ふ事が出來る。家族は家長に絕對に服從し、家の爲めには妻も子も犧牲に供せんければならぬとは、合點のゆかぬ事である。基督者の家庭にも無論家長といふものはあるけれどもその家長が壓制權を持てるにあらず、家の爲めを思ふけれども、自分の幸福を捨て、空しき家といふ名の爲めに犧牲になる事は出來ない。

△我が國の家族

私は此處に法律の事を云ふ事を好まない、然し親族篇に就て一寸考へて見ると、今の法律は昔の家庭制度を基にしたのであるから無理な處がある。戶主が許さない所に、家族は住む事が出來ないといふ事があるから、頑固の父や兄が戶主であれば、如何なる妨害を以ても、その家族の行く先きを止める事が出來る。例へば結婚の時家長がその結婚が氣に入ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なければ、籍を送らないといふ事がある。日本の家庭は戸主に餘り權利を與へて居る。私共基督者の家庭は戸主が主人で餘が臣でなく、皆平等である。子供は自分の子供斗りでなく、神よりの預り物である。それを私共が守り立てゝ行き、どうぞ之れをよくして行くと云ふ事がなければならぬ。私の知れる範圍ては基督者は家族の中て一番弱い者例ば子供とか、婢僕に對して考へが違ひ、また變るべき筈であると思ふ。

△平等の思想を養へ

私は此處に最も子供の事につきお話したいと思ふ。私はどうか家族に對する基督者の美風を、知らず識らずの間に子供に吹き込で行き度い。兄だから弟をいぢめ、姉だから妹よりあらゆる權利があると云ふ事は、基教の思想に適はぬ事である。兄姉、弟妹は年齡の違ふ上から自然的に區別はあるが、親からは一視同仁てなければならない。子供にもまたこの觀念を養ふ爲めに、兄さん、姉さん等と呼ばせず、家中は名を呼びたいものてある。この點は私は西洋の風を愛する。又年を取つて居るからとて兄姉に何でも先きに、また何でも多くやると云ふのも無意味である。或時は上からやれば或時は下から遣るといふ樣にしたい。私は成る可く下から遣るといふやうにする。殊にお菓子などは、小さい者程欲しがるのであるから、下の者に澤山やる。兄弟に對し、親が何をするにも順序を一定せずにする事は、子供の思想の上に不知不識の間に平等主義を吹き込む事になり、子供等が社會に出た以上にも、優等な地位を占めても、其權威を恣にする事なくいつも我れも人も平等と云ふ觀念を以て、謙遜に過して行く事が出來る。

△婢僕に對する心得

それから女中に對するにもさうてある。無論子供に女中を呼び捨てにさする事はよくない。「さん」をつけたい。之れは女中を愛する計りでなく家族、子供を愛するからさうさせたいのてある。日本の家庭制度の誤りは、往々召遣ひを奴隷の如く考へる事にある。昨日も工場に就て專問に研究して居らるゝ桑田熊藏氏に會つて話を聞くに、地方に於て私の工場は家族主義て極くよく行つて居ますと云ふが、さう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いふ處に限つて、勞働時間が十五六時間もある。女中等を使つて居る處でもさう云ふのである。朝から晩迄彼れの時間を與へずにそれで平氣に考へて居る人がある。社會に出て勞働者の賃銀が少いと云ふ事を憤慨するが、最もわが手近に居る女中等は、勞力多くして報酬の少いものである。女中の人格を認めるといふ事は一方では人の爲めてない、自分の爲めてある。

△子供は神への捧げ物

モー一ツかの舊約に書いてある事て基教の家庭に當て篏まる事がある。舊約書には捧げ物をするといふ事があつたが、昔に溯るとアブラハムの時は子供を捧げると云ふ事があつた。之れは我々の家庭に當て篏める事が出來る。宗教を信ずる熱情は凡てのものを神に捧げる事になる。眞に捧げ物として喜ぶ事は、神に子供を捧げる。之の觀念は家庭經營の上に大なる相違がある。子供を神に捧げる事は、意味を思へば嬉しく、また清く立派な事である。ポーロも「汝等を清き生ける供へ物とせよ」と云ふて居るが、子供を清い捧げ物とするは喜ばしい事である。今日の日本人は子供を教育するのは、年老いて子供に世話して貰ひたいと思ふのであるが、基督者はさうあつてはならぬ。私共は子供を神に捧げる事は特權である。世間の人はまさか子供を財産とは思はぬが、多くの人が玩具位には思ふて居る。小さい子供に立派な衣服や、大きな帶をしめさせて、大人が見て奇麗だとか、可愛いゝとか云つて喜んて居る。神に捧ぐる供へ物といふ時には、私共は神の喜び給ふ樣に教育しなければならぬ。

△子供のみの社會なりせば

私は子供の教育を考へる時、いろ〳〵の想像を起す。我々は社會の惡風を憤慨するが、中々この仕事が容易には出來ぬ。然しもしこの世の中から十四五歲以上のものを除く事が出來、十四五歲以下の者のみありて、心ある人が教育したならば、十四五年から二十年位で立派な社會を仕上げて見せる。世の中の改革事業等も子供を自由自在にする權利を貰らへば、それて澤山である。一つの例てあるが、日本の大問題は文字てある。私はこの文字は假名かローマ字に直さねばならぬと思つて居る。然しローマ字

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會も設立されてから十年以上、二十年近くも運動して居るが、一向擴まらぬ。しかも假名やローマ字を遣はぬ爲めに、日本の人がどれ位損をして居るか分らぬ。それは西洋の新聞の活字を捨ふ處を見たならば、誰れでもしみ〲その必要を思ふだらうと思ふ。私は前から話には聞いて居つたが、西洋の植字機を見たのは、一昨年布哇の新聞社に於てが初めてゞあつた、大きな十二頁の新聞を組むのに、植字機が三臺に、僅か人三人で濟んで居る。その植字機はピヤノの樣なもので、アルハベットのボタンを押すと、チャント字が組める、一段組めるとそれが回つて鉛板になり、活字はまたもとの位置に還へつて來る。一人で三四頁組むのは、決して難かしい事ではない。然るにそれよりも頁が三分の一しかない日本の新聞紙は之れを組むのに三十人がかゝつて居る。十人と一人と云ふ人力の不經濟は、社會經營の上から見て、實に大した相違が出來る。かやうな勞力を省く機械が世の中にありながら、これを應用する事が出來ない文字を使はなければならぬといふのは、誰れの要求か、決して子供ではない、大人である。もし十四五歲以下の兒童のみとすれば、彼れ等は必ず難解の漢字を厭ふて、假名かローマ字を取るであらう。さうすれば文字の改良は容易に出來、人力の經濟延ひては財力の經濟にどれ程なるか分らぬからいふ文字を使つて居る間は、決して西洋人と競爭する事は出來ない。安藤太郎氏が非常に盡力して居らるゝ禁酒事業でもさうである。私は田舍に行つて禁酒演說をした時に、青年に向つて云つた。年寄が唯一の樂しみとするその酒を、年寄に向つて止めろと云ふのは慘酷かも知れぬが、その味を知らぬ若いものこそ禁酒すべきである。酒も初めは決して甘味しいものではない、飲み慣ふ計りに、癖がつくのである。それ故未だ味を知らぬ間に、かやうに有害のものを斷然退ける事は、最も容易にして、最も有効な仕方であると云つた。かやうな事も私共の家庭に歸れば自由に出來るのである。殊に婦人の力によりて如何ともなす事が出來る。身老いた舅姑は飲むかも知れぬが、子供丈けは初めからかゝるものに親しませずに、立派な禁酒家に育て上げる事が出來る

△夢の如き理想の社會

又昔の政治學者、經濟學者は、想像を以て理想の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界を繪き、社會の人が誰れも彼も働らいて、その收獲は一つの倉庫に入れて置き、人々は此處より必要に應じて取つて來るといふ社會が出來たら、それこそ理想の世界であると云つたが、驚くべき事には家庭は今日に於て、既にその通りになつて居る。一家では人々が働らいてその收入はまた人々の必要に應じて使つて居つて、誰れも怪しまない。社會の改善などゝ云ふ事は、實際家庭をその儘に現はす事が出來ればそれで充分である。斯く考へて來ると、家庭を經營する事は面白い事で、眞意に我々の思ふ事を實行する事が出來る。家庭は夫婦よりも子供に多く必要がありはしないか、極端なる一派の學者の間には、夫婦と云ふもので家庭を作るといふ必要はないとさへ云つて居る。然し子供の爲めには家庭がなければ、生れるとすぐ兵營のやうな、また幼稚園のやうな處に入れられないとも限らないが、家庭の敎育が受けられない事は、どれ丈けの缺陷か分らぬ。實際家庭は子供の爲めに一番必要であり、その子供に力を入れる事は、また何よりも大切な事である。基敎主義の家庭が、子供を本位として神の御前に淸き生る供へ物とする事によりて、社會の進歩がどれ丈けあるか分らない。

思ひ出

白井胤祿

▲靜かに暮るゝ春の夕を獨り眺めて居ると、何處ともなくハラ〳〵と花が散つて來る。人生のあはれは軟かに心に泌み込むやうに感ぜられる。此の花のやうに世を去つた人、余の心に深い印象をのこして世を去つた人のことが、其れから其れと思ひ出される人生の逆流に掉して屢ば壓し流されやうとしたときに、余の手から離れて天の彼方に飛んで往つた愛するもののことも偲ばれ、辛い思ひがまた新にせられる。然し此う云ふ場合に何時も思ひ出さるゝ一人の婦人がある。其の交際は極めて短かかつたが、非常に深い印象を與へられた。余は少し此の人のことを書いて見やう。

▲此の人は明治十八年八月二十三日東北の或る市に生れ、高等女學校を卒業して、暫らく小學敎育に從

事し、更に志を立てて日本女子大學校に入り、國文科及び理科を修め、四十二年業を卒へて、東北の或る高等女學校の先生となつた。まだ女子大學校に在學中或る軍人に嫁し、高等女學校の先生となつた頃出產し、產後の日立ちが良くなかつたので、其の翌年から所々の病院に病を養ひ、遂に大學病院に移つたのであるが、衰弱が甚しいので、如何なる名醫の治療も効を奏せず、遂に昨年の秋此の世を去つたのである。余が此の人を知つたのは大學病院の病室で、病が已に危篤になつた頃のことであつた。全く偶然の引き合せて、或る日の夕余の知れる陸軍の少將を訪ふたところが、某の部下の某大尉の夫人病んで命旦夕に迫つて居るから、是非見舞つてくれまいか、特に宗教上の話を聽きたがつて居るさうだから今から直ぐ往つてもらひたいと云ふ足許から鳥が立つやうな話て、聊か不意打を喰つたのであるが、其の事情を聞くと氣の毒てもあり、又主の道を說くべき機會の與へられたのを見のがしてはすまぬと考へて、直ちに出かけたことがある。余は此のやうな經路て此の婦人を知つたのである。其れは死の二週ほど前の夜てあつた。

▲長い間の患いに、瘠せこけ、其の皮膚の色は象牙のやうで、始めて見たときには痛々しい思ひと、神々しい氣持がした。以前は非常に健康て、男子も及ばぬほど元氣て、體格も立派であつたさうであるが今は全くヘルプレッスの有樣で身動きさへ自由に出來ぬのである。余は初對面ではあるし、それに良人が折惡しく不在であつたので、宗教の話を持ち出すにも工合が惡かつたが、色々尋ねて見ると、肉の世界の勢力が次第に薄らいて靈の世界の光の次第に輝いて來る此の場合であるから、平常よりも解りが好い。女子大學に居た頃基督教を聽き、聖書も讀み、教會にも出席したことがあつたさうである。讃美歌は非常に好きで常に歌つて居たとのことであつた。然しまだ基督教の信仰生活をするほどには進んで居なかつた。其の道理は多少解つて居たであらうが、踏み込んで之に生活すると云ふには至らなかつたのである、ところが此の夕の話は其の精神狀態に著しい變化を來した。余の話は不十分であつたが、其の暗示で色々是まで聞いて居たことが思ひ出されたのてあらう。其の翌日の夜病床で受洗することとなつた。已に病勢が餘ほど進んで居たから聖書なども自

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分の手で持つて讀むことが出來なかつた位で、基督教を深く研究することは出來なかつたであらうが、活ける慈愛深き神を認め、之に信頼し、基督に於ける新しい生活を辿り行くことを決心して居た。其の良人の云ふところによると、受洗以來著しく慰安を覺え、心安く人生の瀬戸を通り得たさうである。

▲余は此んな關係から此の人の葬儀を司らねばならぬこととなつた。或る教會堂を借りて式を執り行つたのであるが、比較的に盛んな集會であつた。余は其のとき、此の人について感ずる二三の點を述べた

▲「此の夫人の生涯は僅かに二十六年であつた。花ならばやつと咲きかけたところである。已に凋んだ花の散るのは其れほど殘り惜しいとも思はぬが、今開いたばかりの花が時ならず散るのを見ると非常に殘念な哀れな心持がする。諸君のうちには此の遺骨に對して、あの方がまあ何故此んなことにおなりになつたであらうと考へられる方が多からうと思ふ。人の生命ほど測られぬものはない。實に晨夕を待たぬ。或人「人生は冒險である、第一生れ出たことが冒險である、其の次に結婚するが、是れも隨分大いなる冒險である。更に最後に死と云ふ大冒險をなさねばならぬ」と云つたが、熟く考へると我々の生涯は冒險な事をやつて居るのである。何時暴風に逢ふか暗礁に乘り上げるか、知れないのである。案內知らぬ地に踏み込むやうな心細いものである。然し此の夫人には慰安があつた。死と云ふ大冒險をやられる場合にも、其の心の中に大いに賴むところがあつた。其れは何んであつたかと云ふと、最も熟練で親切な水先案內者を知り、之を信じ、之に任せて居られたことである。テニソンは『洲を過ぎつて』てふ短詩のうちに『黃昏影かすかなり、夕の鐘も聞ゆ終に闇黑となりなん。時間空間の境を越えて、遠く我を流し行くとも、我は顏と顏とを接して、我が水先案內者と相見んことを望めばゆめかなしき告別を爲す勿れ」と歌つたが、夫人にもまた此う云ふ心持があつたのである。好意賴母しく、同情を我に寄する天佑のあることを信じて此の世の港を船出したのである。僅かに二十六年、夫人はまだ此の世に於て見殘されたところもあつたであらうし、爲すあらんとする志を爲し得る間もなかつたでもあらう。此の港の船がかりの餘りに短かかつたことを殘念に思はれたであらう。然し是れは先きを急ぐべき何等か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の理由があつたからであらうと考へねばならぬ。神は限りなき愛を以て斯る日程を定められたと信ずるの外ないのである。

▲次に夫人の性質は快活で、親切で、好く氣のつく人であつたさうである。忠實に良人に事へ、友情にも厚かつた。然かのみならず己が天職を認めて、教育に從事し、將來も之に身を委ねる考へを有つて居られた。一個の女子としての生涯は是れて以て立派に出來上つて居るやうである。然し我々から見ればまだ一つ缺けて居るところがあつた。其れは生涯の根底が定まつて居なかつたことである。貴方は此う云ふ重い病のうちに居て、何を頼りにして居られますかと尋ねたところが、其の答へは不幸にして根底のないものであつた。人生には時間と空間とに制限せられない要素がある。此の要素の具備せぬ間は、人生は全うされて居らぬ。何處かに不安がある。耶蘇は之を永生と云はれ、更に之を説明して永生とは唯獨りの眞神と其の遣しし耶蘇基督を知る是れなりと云はれた。人は眞面目になれば、何うしても己れ以上に生活せねばならぬものである。自分だけては滿足が出來ず、神を認めて之を樂まずんば已まざるのであらう。夫人は以前から此の點に氣がついて居たであらうと思はれるが、まだ明白でなかつた。然るに幸にして其の死の切迫した時に當つて之を悟られた。其の描き來られた生涯は、最後に至つて瞳を點せられたと云ふやうな譯で、此の信念が明かになつたために、其の二十六年の生涯が活きて來たやうに感ぜられる。

▲最後に夫人の志が教育にあつた如く、また自らも好んで教育を受けられた。日本の女子としては最高等の教育を受けられ、卒業後も尚ほ勉強して文部省の檢定試驗などにも應ぜられたと云ふことである。先日余が御見舞したときに、隨分長い間苦しい學科を病床に御勉强になりましたねと云つたところが、夫人は本當に然うで御座います、私は始終然う考へて慰めて居りますと云はれた。苦惱の多かつた病床も夫人に取つては實に高尚なる學校の教室であつたのである。英國の或る歷史家の碑に「彼は學びつゝ死せり」と彫んであるさうであるが、夫人に於ては此の詞を適用することが出來るやうに思ふ。病床と云ふ教室で、最後に學ばれたものは神のことであつたが、今は他界に於ける一層高等なる學校に入り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

之を益々深く明かに學び居られることであらうと思ふ。
▲斯く考へて來ると夫人の死は死でなく、發展である、進歩である。良人を始め、其の親しい方々も、此の邊を考へられたならば、悲しみのうちに慰めを得、嘆きのうちに希望を得られることであらう」。

ジェネヴァに於ける學生休養室

記者

一日中仕事に追はれて忙しく、且つ、比較的單調な生活を送つて、變化に乏しく、樂しみに飢えて居る學生に對して、少しでも餘計の慰安と娛樂とを供給する目的で、近頃諸國に休憩所或は休養室とでも名附けられる可き場處が出來て居ます。瑞西國の有名な大學所在地ジェネヴァに設けられた此種の計畫に就て、面白い記事を見ましたから、一寸御紹介致しませう。勿論抄錄に過ぎませむ。
▲吾々女子學生のクラブとして使つて居るのは、大學の建物から五分とは離れない所で、一階目で大きな、日當りのいゝ室です。是れを使ひ始めてから、未だ漸く一年ですけれども、青年會の仕事の諸方面に非常に好結果で、今では、男學生の方でも、此に倣ふて、同じ様な場處を設けました、勿論、男女學生は、全く隔離して別々に仕事をして居るわけでもありませむ。例へば、日曜のお茶に呼むだり、珍らしい講義を此部屋でする時には招いたりもします。本當に見て頂きたい様な部屋です。大きな窓が三つあつて、上等の印度製の床敷、洒落た縞の卓子掛、それに蔦の類とか、水草とか、實のある物とか、何か氣を附けて生けて置く積りです。
▲「歡迎」といふ字を七ケ國の言葉で、彩つて掛けてありますし、それに諸處の畫端書だの、旗だの並べて置くのは、少し部屋の品を下げるかも知れませむけれども、各地の景色、殊に他の諸大學の畫など置くのは一寸面白いものです。こんな事もありました。或時まだ若いブルガリアの婦人で、醫學の研究に來たのださうですけれども、着いたばかりではあり、常用語の佛語が極怪しいので、餘程淋しさうでした。フイリポポリスから來たと聞きましたから、壁に懸けてあつた、其地の畫端書を見せたらば、自分の家が遠くの方に見えて居るとかで、急に嬉しげ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に元氣づいたのでした。

▲隨分、外國人の多く入り込むで居る大學ですけれ共、誰れが他國人かといふ事は佛蘭西語の組に出さへすれば直と分つて終ひます。もの丶三十分も大勢の前で讀むだり言つたりさせられて、後から慘く批評されるのですから、お互同志直に大に同情するのです。

▲講義の間々に十五分づ丶休みがありますから、皆廊下などでブラ〳〵して居ますが、此時間に、多少極りが悪いのですけれども、新入らしい人の側へいつて話かけるのです。學年始め二三週間は何時でも、休憩所の功能書をカクシに一ぱい詰めて登校したものでした。此功能書は、各停車場で、市の旅行案内團から、新着の學生らしい人に分布して貰ひます。そしてたつねて來た人には、下宿や貸し間の世話などもしてやるのです。

▲大學の建物といふ建物には皆青年會の掲示を出して置くのですけれども、氣をつけて見る人が少いのには困つて居ます。

▲ミス、ラウスか一度來られて以來餘程容易になりましたが新入生を搜し當てる一番の場處はロシア料理或は、ブルガリア料理の小店です、其中でも、一經濟料理」と名の附いた店などが一番流行るでせう。其處では監督も料理番も、給仕人も皆ロシア人で學生で居る人もあり唯移住して來たのもありますけれ共、何れも一日何時間と働いては、食費に換へるのです。忙しい醫學生などが、そんな苦しい遣り方でよく卒業まで漕ぎつけると思ひますけれども、それより外、勉强が出來ないのですからどうにか卒業はするのです。是等の大部は猶太人です。猶太人といへば、漸く百分の三位の割でロシアの大學が入學を許すのですから、勢ひ、他國の學校へ出る人が多くなるのでせう。或學生などは一と月十二圓内外で暮して居るものさへあります。(是れは物價の高い歐洲の生活としては、極端の低額です)それですから、下流の人達で氣に掛けないからとは云ふもの丶、一方必要に迫られて、現在見る樣な雜居もする樣になるのでせう、本を共同に使ふばかりで無く、一室にひどい有樣で大勢寢起をする樣な事も止むを得ないのです。此料理店では僅かの金でスープ二杯肉に野菜にパンと喰べさせ、利益が上れば苦學生の食費、月謝などの足しにします。萬事がロシア語ですから

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

料理札からして隣りの人に讀むで貰はねばならず、注文はやはり露語て書くのてすから、自然近付が殖えて來ますし、それに近頃ては、青年會の人と知られたものてすから、米國青年會のモット氏の講演てもある時には、切符を取つて呉れと賴む人が大變出來ました。

▲此頃ては當時青年會に會費を拂つての會員が四十四人、外に委員が十二人て、委員は皆青年會員てすけれども、單に此休養所を使ふ爲だけには宗敎の如何を問ひませむ。それてすから會員外の多數の人が午後のお茶だの、講演だの、遠足だのといふ時には集つて來ます。

▲モット氏の來訪以來、聖書の組に出るものは百を越える位で、其組を持たうと望み出る者が二十二人もあります、是れは僅か五十六人の青年會員から出す數としては隨分良い方だと思ひます、現在のところては、佛語て書いた聖書組用の敎科書といふものは一つも無いのてすから、是等の敎師の骨折も一層多い事になりました。此種の休憩室は近來ジエネヴアの外他の市にも設けられ、ローサン、ツーリツヒ、ベルン、等て既に着々其功を奏して居られる樣てす。

通信といふのは大略こんなものてしたが、此樣な意味に於ての場所が早晩、我東京にも設けられ、或は初めて上京せらるゝ方の伴侶ともなり、或は諸種の會合娛樂の室として、お互に自由に使用する事の出來る日の來らむ事を切望するのは獨り記者のみてはありますまい。

隨感

過度時代の犧牲者なる我れ等が母

吉田のぶ子

▲考へて見ますと實に母と申す言葉位意味の深いものは御座いますまい。上は私等の敬愛する一人の御子の御母マリアの君、下は獰惡何憎みてもあまりあるユダの母、又學校なども母校と申ますが、父校とは申ませぬ。又軍艦なども母艦と申ますが父艦とは申しませぬ。實に母とは凡てのものゝ根元てあります。されば其母たるべき人の修養は如何程世の中に影響を與ふるものかわかりませぬ。彼の有名なナポ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

レオンが國家の隆盛は如何にして得らるゝかを家庭敎師に尋ねました時「婦女を敎育するにあり」と申したと云ふ事は誰もよく記臆する話であります、實に聖マリアは一面人の子の母として其臨終まで御側をはなれ玉はざりしは變らさる母の愛の表彰ではありますまいか。或は孟母の如き或は我國に於ける義人烈士の影には此力の活働するのが見られませう。

▲海の東西を問はず、親として子を愛せぬものは御座いますまい。其幼き頃は其兒が乳房かむこと強ければ其兒の强健なるを悦び、漸次生長しては其敎育に日も足らず、まして病などあらんとき我身もて代らんと祈願せし赤染衛門の如き、誠に人の母程慈悲の深きものは御座いますまい。況て日本人は其子を愛します、或雜誌に「西洋人は子供を己等が後に從はしめ日本人は子供の後に歩く」と書いて御座いますが、實に其通りで、日本の舊時代の婦人などは嫁しては舅姑又は良人の虐待せらるゝとも一人でも子がありますとよく三十、四十の年月を其子のために辛抱した婦人も澤山あります。ですから母の權勢を振ひ得る地位に至りますと、時々其子息よりあまり多くを要求するの傾がありました。さうてすけれど夫等人の子の時代となりましては倫理思想も大分變りまして、西洋式の個人主義の勃興となりました。そこで老婦人が萬難を犯して養育せし子女は獨立して食餌を拾ふに至れば、忽ち其父母を厭ひます。況や母親を厭ひます。嫁さむとするものは姑なきを撰び、娵りたるものは間もなく母親を厭ふ。

▲曰く西洋にては父貧窮なるも息子働きて豊かに暮ししかも其父を顧るなきも一人として其子の非を鳴すものなし。又親は敎育の義務あるも子に報恩の務なしと。何れ其過度時代に於きましては、必す其犧牲となるべき人が生ずるのでありますなれど、考へて見ますと我等の母たる人々の境介程憐なものはないと思ひます。其若くしては夫に愛護せらるゝ米國婦人の樣でもなく老いては重荷として厭はるのであります。物質の文明は歐米より賜はりたるものに相違ありませぬが、精神修養に至りては我にも倘日本化されたる儒敎と云ものがあります。此敎の根本は孝でありました。即孝は百行の本とか、又忠臣は孝子の門より出づとか申して居ます。孝は言換ますれは子の親に對する犧牲であります。前述の樣な譯でありますのに物質文明と共に輸入せられたるものは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

極端なる箇人主義であります。之を鼓吹する青年に母の愛をとくものがあれば、直ちに本能の二字で打ち消します。他人は我頭が古いと御笑ひになるかも知れませぬが、之をしも悪魔呼び申さずして、他に之より酷なる言葉が御座いませうか。實に母の愛は常に愛の純なるもので、やがて神の愛の寫しては御座いますまいか。此等の間に立ちて老婦人の地位を考へ玉へ。其よく修養ある人々はとにかく多くは悶えの中に日月を送るて御座いませう。

▲世は「我儘なる娘と深切なる嫁」との言葉が御座います。深切なる嫁のすることも我儘なる娘の一事には及ばないと申事で御座いませう。何故で御座いませうか。私は兩者の愛の缺乏にあると思ひます。實に此兩者の間の衝突は昔から幾多の賢人によりて研究せられたる題目で、西洋などでは漸く別居と云ふ様なことで解決せられたる様です。而しこれとても決して完全な制度とは申されますまい。故に直ちに我國に於て採用することは或程度の家庭に於ては全然實行し難き理由があろうと思ひます。姑として惜む人も其愛人の親なるを思へば、其處に愛の生じないことはありますまい。西洋の諺に「愛は理解す最も深き愛は最もよく理解す、神は愛なりと」申すことがありますが、此理は玆にも應用され得ると思ひます。假令基督教は箇人本位だと申しても、一方の愛の教だと申ことを忘れてはなりませぬ。或人が「昔時の家庭は義理の家庭であつたが、廿世紀の家庭は愛の家庭でなければならぬ」と申されましたが、誠に左樣だと存じます。どうか基督教者たる我等婦人は、愛と同情とを以て、之等の婦人を導きたいものであると思ひます。

默示錄の基督

柏井園

默示錄と云ふ書物はファーラーが、基督の武士の集合號令であると云ひ、バイシュラグが基督教的希望の史詩であると云つた通り、勇壮な調子に富んだ鼓舞奬勵の書である、此の書物のうちに表れて居る基督についての信仰觀念はどのやうなものであるか新約の他の卷に現れて居るよりも一層痛切に此の書物に發揮せられて居るは何う云ふ方面であるか、研

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

究の價値ある問題であらふと信ずる。ここに試むるのはたゞ其の一班に過ぎない。

イエスの事實について默示錄の傳ふる所は極めて僅てある。彼がユダ族のダビデの家系から出たこと、（五〇五、二十一〇十六）使徒は十二人あつたこと（二十一〇十四）、大都に於て十字架に懸けられたこと（十一〇八）、死の中より復活したこと（一〇十五、十八）、天に擧げられて寶座に坐するものとなつた事（三〇二十一十二〇五）くらひてある。

イエスの品性につきては聖きもの誠なるものと云つてある處が二個處ある（三〇七、六〇十）。又十九〇十一には忠信又誠實と稱へらる（十九〇十一）とある。キリストが聖なると云ふことはキリストの第一の性格に數ふべきものであつて、ペテロが「汝は神の聖なる者なり」（約六〇六十九改正英譯に據る）と告白したやうに、全く罪の汚點なく聖純高潔なる品性はペテロにも又この書の著者にも第一の印象を與へたものと見へる。次にはまことと云ふことであるが誠の字を用ひてあるは如何てあらうか、誠意誠心と云ふやうな意味もある字ではあるが、サイヤーの字典などを參照すると、此等の處では、不完全不確實薄弱などと反對で、完全確實堅固の意味を示したものと解してある、バイシュラゲは信ずるに足る性質であるとしてある、さうして見ると誠よりは眞の字が適當であると思はるゝ、即ち眞人物眞男子と云ふ意味の眞である。キリストの性格に倣ふ聖徒の品位も亦きよく且つ眞でなければならぬ次に默示錄に最も良く現されてある。キリストの性格の一面はその勇氣である。五〇五には「ユダヤの支派より出てたる獅子」とある、此は無論勇猛なるキリストを云つたものである。それから鏘の杖を以て諸邦の民を司る」事（一〇十六 手には利鎌を持て居ること（十四〇十四）、目は火焔の如く兩刃の利劍、其の口より出づ（一〇十四、十六）と云ふことなど、皆これキリストの獅子的方面を表したものである。イエスの絶大なる勇氣猛心は福音書でも屢々瞥見することができる。特に死に處するに際して顯れて居るが默示錄の著書は最も良くこの事に注意して居る。

然しながら獅子であるキリストは又小羊である五〇五以下を讀むと面白い。獅子であると聞いて見て視ると獅子ではない、小羊が立つて居たことが書いてある。獅子のやうなイエスの勇猛の精神は、小羊

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のやうな柔和謙遜な品性のうちに燃えて居る。小羊なるキリストにつきてヨハネの書いた所にもなかなか視るべき特色が多いのである。三〇二十にある。『見よ我れ戸の外に立ちて叩く、もし我が聲を聞きて戸を開くものあらば、我れ其の人の許に至らん、而して我は其人とともに其人は我と偕に食せん』とあるあたりは其の一てあつて、何たる美しいやさしひ感情が此のうちに現はれ居るか。それから七十七には『小羊彼等を養ひ彼等を活ける水の源に導き又神彼等の涙を其の目より拭ひ給ふべければなり』とある。又キリストと敎會の關係を新郞新婦にたとへて小羊の婚姻の期すでに至り(十九〇七)など云ふ處もある。

勇氣と柔和とを兼ね備へたキリストの品性から、キリストを信ずる聖徒の品性の理想が出來るのである。著者はエペソ敎會の忍耐を稱贊し(二〇二十三)、又聖徒の忍耐(十三〇十、十四〇十二と)云ふことを云ふ一方には、臆病を罪の第一に置き(二十一〇八)、ラオデキヤの敎會の冷にあらず熱くもあらざる事を攻撃し、冷なるか或は熱からん事を願ふと痛快なる警語を吐いて居る。(二〇十五、十六)

イエスは何人なるか　先づイエスは忠信なる證者てある(一〇五)。この事を表すため、即ちキリストが光であり光を與へるものであることを示す爲に非常に美しい想像を用ひてある。右の手に七の星をもち七の燈其の間を歩む者(一〇一二)であるとか、我は輝く曙の明星なり(二十二〇十六)とか云ふ句はそれてある。それから又イエスは救者であつて、我等は其の死によつて罪を潔めらるゝと云ふ信仰は一〇五をはじめ全卷に充ちて居る。それはパウロ、ペテロ、ヨハネ等の書翰に表れて居る所とかはらぬが、十三〇八に『世の始めより殺され給ひし小羊』と云ふことがある。ここは『殺され給ひし小羊の生命の冊に世の始より其名を錄されぬ』と讀まれぬこともないが果して日本譯や改正英譯の通りであるとすれば非常に神秘な意味が含まることになる。キリストの犧牲はたゞ千九百餘年の昔カルバリイの丘で供へられたばかりでなく、世の始天地の大本からあつたのであるか。キリストは世の始から苦まれたのである。然らばキリストは世に生れぬ前から存在し給ふたてあらふか。然り、彼は神のロゴス神の子である(十九〇十三、二〇十八)造化の始(三〇十四)てあ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。造化の始とは何と云ふ意味であるか。バイシュグのやうに最初の受造物であると説明する學者もあるが、多數の學者はこれは造化の源、其の基礎の意味であると説明する。

　默示錄の著者はキリスト今も現在して無限の崇敬禮拜を受けつゝある事實を示すに全力を用ゐて居る曰く『曩に殺されたりし小羊は權威、富、知慧、能力、尊敬、榮光、讃美を受くべきものなり、……願くは讃美、尊敬、榮光、權力寶座に坐する者と小羊とに歸して世々限なからんことを』(五〇十二、十三)と。又『救は寶座に坐せる我等の神と小羊より出づるなり』と云ふことを無數の聖徒が大聲に呼ばる光景を描いてある。此れは單に詩的の想像であらうか。神學思想であらうか。否これは事實である。これが事實であればこそキリストは羅馬帝國と戰ふて勝利を得たのである。小羊は獸(羅馬の帝國)と戰ふて勝つた(十七〇十四)。愛の力犧牲の力は腕力と戰ふて勝利を占めた。しかし默示錄の書かれた時代は戰の開かれたばかりで基督敎の前途暗憺として心もとなき時であつた。然るに著者は神より與へられたる信念により展望大に開かれ最後の勝利を確信し、希望の史詩を詠じ進軍の曲を奏して味方を皷舞したのである。我等卷を閉ぢて靜に念ずるならば勇ましくして且柔和な悲みの人であつたイエスの姿が聖き光に包まれ世界の中心に在りて萬衆の崇敬禮拜を受け給ふ此の上もなく尊く嚴な光景が恍として我等の眼に浮び來るのである。我等はこの書あるを感謝せざるを得ない。

文苑

イエシュダス

スモール女史作
小此木松子譯

(序　言)

昔なからのモルワラの町では、何事も古いか貴いのでした。されどモルワラ一の長者といふが嫁探しにも、何がさて、是も亦舊弊なプニアパーの村からと迎へる事になりました。

　丁度西洋ごよみの四月十二日、眞夜中時とも思はれる頃、古い〳〵町の大門がギユーッと開いて、待

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちに待たれた嫁の君等を迎へ入れた其晩からは、永くさびれたモルワラの町も上を下への賑ひでした。催しの數々、面白、可笑しう續いた後で、是は又珍らしい思ひ附きの、宣教師の眞似俄役者は、ヴエンカトロ、といつた若者で、今迄とても巧みな身振り人眞似でよく父のお客を歡待した者でした。

こゝに宣教師といふは、ウエストン、サヒーブと呼むだ老人でしたが、聲から、身振り、白の夏帽蝙蝠傘の握り方、聖書の持樣に至る迄昔を其儘に寫し出したヴエンカトロの巧みさには、見物もあつと驚くばかりでした。其低い、稍震えを帶びた聲で說き出すところは、彼の何時も美はしいイエシユの御身の上です。地上に下れる神の御子貧しきに食を與へ病めるを癒し玉へるに、家なく友なく、此世にさすらひ、遂には、我等の爲に十字架上の露と消へ玉ふたといふ節に至つては、其身もふるへ、聲涙共に下るかと思はるゝ計りでした。しかし昇天複活の段に進むでは、其心、希望と喜悅に躍るかと思はれ、更にイエシユの恵とイエシユの愛今も尙此世に存じて人世の惡と戰ふと說き出した時には聽衆皆息を呑むで、其戯技なることを忘れました。まことに是れは、演者にとつても未曾有の成功で喝采場裡に場を閉ぢたのでしたが、其夜も明けて翌日は、集ふた客も皆散つて、淋しい町は、また、もとの靜けさに復りました。

*　*　*　*　*

（上）

古いブニアパーの町での婆羅門僧、某の子にナラヤン、ラオといふのは、幼い頃から禮拜其他の儀式に就いて詳しい口傳を受けて居ました。齋戒沐浴して供物を運ぶ事などは、此子にとつては、日每の務めて、それに信心深い母の傍に平和に過した邸住居では、父の業を受けて僧となるより外、何の希望も起らなかつたのです。

或朝、定めの沐浴も濟したナラヤンは、美くしい頬に、新らしい白の法衣も似合はしく、擇りに擇むだ供物の盆を頭に載せて、拜禮所へと急ぎました。時刻は早し、觸るれば汚るゝといふ浮浪人の群も少いに安心して曲つた角の出合頭、驚き呆れたナラヤンの袂に觸れて怱惶身を隱した者は、たしか汚らはしといふ浮浪の徒と思はれました。今は身も汚れ、供物も損じて此儘神前に近く可きではありませむ。

何うしたものかと考へた殺那、ふと心に浮むだのは小山の上の神泉でした。近さは近し、其處に閑居の老僧は心ある人だとさへ聞いて居ました。

さて此樣にして訪ね、此樣にして、結むだ緣が緒て、ナラヤンの一生には大きな變化が起つたのです。此時以來屢々訪ねた老僧の話を聞いては、子供ながらに、宇宙の大、自然の美、何彼と心に染む事も多く、是等を造り玉ふた神が戀しく、此神即ち、大婆羅門に比べては、父母の所謂神などは、唯々、少な一部に過ぎぬといふ事さへも明かに覺りました。

やがて此子も成人し、寺や家内の見張りもする樣になりますと、其父は豫ての願ひ、諸國行脚の巡禮にと旅立ちました。夫々の札處を廻り神々の前に額き、御水を頂き、罪を淸める習慣でしたが、此腐敗した水が媒で、世にも恐ろしい疫病を起したのです巡禮達は勿論の事、家族、近隣のもの迄も、多くは迷信の犧牲となつて、世を去りましたが、ナラヤン亦、此時以來、世に孤獨の身となつて、世を憎み、神を恨むの人となりました。

しかし斯く迄苦むだナラヤンの心に、唯一つ、そも不思議な記憶が殘つて居るのでした。まこと、夢の樣に茫として何とは取り出し難いのでしたが、昔日に此世に出て、民を惠むだ、救主の話が、遠い昔の幻の樣に思ひ出されるのでした。此不確な記憶の奥の探りたさに、朝夕、心を苦しめたのでしたが、其救世主の御名さへ覺えず、何處、如何なる殿堂に在すとも思ひ出す由は無く、母さへも無い今の身では、唯山上の老僧を賴りに、若しやの望みを掛けて一日其庵を訪れました。

しかし、訪ねた甲斐もなく、老僧は知らずと言ふに力落ちて、淋しく石段に腰打下ろした其殺那、何處からとも無く、昔の記憶は、あり〳〵と心の鏡に寫る樣でした。思へば是れは、母が仕馴れた夜話でもなく、老僧の說かれた功德でもない、今は遠い子供の頃、姉の嫁いたモルワラの祝の席上、母の膝に抱かれて聞いた事よと幽かに思ひ當りました。さてはと嬉しさに胸躍らせ、驚く老僧を跡に、我家へと馳せ歸りましたが靜に橫はつて記憶を呼べば、夫れから夫れへと思ひ出もおほかつたのです。即ち、言辭と行爲とを以て人を助け玉へる救ひ主、報いを望まず、榮えを捨てゝ世を救はれたといふ其御心、尊さの程を思へば、心は自づと湧き立つのでした、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

唯其生涯の終り近く、遂に兇徒の死刑を受け玉ふた事を思ひ出しては、言ひ難い、悲歎と絶望とに我を忘れる許りでした。

其後幾日を經たのかも覺えませむ。或日ナラヤンの心には、又新なる不安の念が起りました。彼救世主といはれた方は常一樣に此世を去り玉ふたのでは無く、天に復り、再び生を享げて遂に勝利の人となり玉ふたと聞いた記憶が、遠い〳〵反響の樣に心の奥に囁くのでした、そして日一日と經る中に、此信念は強まる計りで、遂には疑ひ難き事實とさへ思はれたのです。嗚呼、勝利、勝利、慈悲の勝利、死と凡ての災厄とは是が爲に力無きものとなつたのです。ナラヤンは、言ひ難い讃美の念に打たれました。

此悦びに驅られたナラヤンは、朝に夕に後庭に下り立つて其荒れ果てた草原を開き初めました。馴れぬ僧侶の手に鍬鋤とつては、苦しさも一しほでしたが、幾日の後草を拂つた其跡には、手づから小やかな社を建てたのです。此は、彼の救世主禮拜の堂と定めて、朝夕、冥想靜寂を望む時、一人此堂に入つては深き祈願をこめる爲であつたのです。

其後、斯る一時の渴仰も醒めて、再びもとの冷靜に復つたナラヤンは、體ありて魂なく社ありて神無きの堂を厭はしきものに迄思ひました。そこで、遂には庭も昔の草原にかへり、堂は傾き屋根は壞れる有樣でしたが、或朝、ふと御堂に近く、歩を寄せて、絶えて久しい扉を開きますと、何時とはなしに種子のこぼれた熱帶の樹は、青々として葉をさへ出し、床を貫き、遂に屋根にも達せむ勢ひでした、是を見たナラヤンは、言ひ難い信念の教を眼の當り見た心地でしたが、此時以來、此樹の如く神を求め、光を追ふて一身を捧げむ事を誓ひました。

曾て山上の老僧に別れて以來、凡てを秘して洩さなかつたナラヤンも今は老師の力に頼るの外なく、再び山の庵へと急ぎました。世を捨てゝ、思ひ一つに籠つた身の有難さ、年こそ取つたれ、心は若く新しきを聞き、眞理を探るを樂しむだ、此老隱者が、今日若者の思ひ出を聽いての悦びはまことに美くしいものでした。自分は長い修業の年月に斯く迄奇しき救世主のあつたとさへも知らずに過ぎた、速に家を捨て、行ひを淸うし、心を潔めて、遠く光を求めよと說く老師の言葉に、若者も一層力を得て、さらばと茲に旅の心を定めました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

空には星の花美くしく、地は未だ眠れる次の朝、旅の衣に身を固めた、ナラヤン、ラオは遠く、彼のモルワラの町へと旅立ちました。

新刊紹介

〇**社會の强敵**　在仙台哲學博士アーレン、ケー、ファウスト氏が、最近我が國に於て結核の爲めに斃れたる者十三萬三千人の多きに達せるを見て、同情の念禁ずる能はず、世人の注意を喚起せんが爲めに、該病に關する醫學上の事實は、コッポ、北里の諸大家より得て、社會的、經濟的、國家的立脚地より其撲滅の義戰の第一着として書かれたるもの、著者も特に學校敎師諸君及び多數の兒童、若くは靑年に接する人々の殊にこの患者の取扱方及び豫防法につき研究せん事を勸告せられたるが、此處にも亦此の種の人々にこの書の一讀を促さんとするものなり。發行所日本橋區本町三丁目博文館定價金參拾五錢也

National Committee

Headquarters, 41 Sanbancho, Kojimachi, Tokyo

Mrs. Hana Ibuka, Chairman
Dr. Kei Okami, Vice-Chairman
Miss Tami Mitani, Secretary
Dr. Tomo Inouye, Treasurer
Miss Michi Kawai.
Active Member World's Committee
Chairman Women's Sub-committee
World's Student Christian Federation
Miss Matsu Okonogi,
Editor "Meiji no Joshi"

Resident Members	Non-Resident Members
Miss Ume Tsuda	Madame Asa Hirooka, Osaka
Miss A. B. West	Mrs. K. Araki, Osaka
Miss Uta Suzuki	Mrs. Koito Saiki, Kyoto
Miss Matsu Okonogi	Miss M.F. Denton, Kyoto
Miss Kita Hasegawa	Miss Michi Matsuda, Kyoto
Miss Tei Ninomiya	Miss N.B. Gaines, Hiroshima
Mrs. G. M. Fisher	Miss Wynne-Wilson, Nagoya
Miss Sarah Ellis	Miss M. Brownlow, Hakodate

Secretaries
Miss A. C. Macdonald, National General
Miss Ruth Ragan, National Office
Miss Margaret L. Matthew, General, Tokyo
Miss G. R. Watney, Associate, Tokyo
Miss Mary Page, Special Worker
Miss Miyo Kobashi, Assistant Editor
"Meiji no Joshi"

部數	定價(郵税共)	海外
一部	金五錢	金九錢
十二部	金五拾錢	金壹圓

廣告			
一頁	金六圓	半段	金貳圓
半頁	金三圓五拾錢	一行	金貳拾錢

明治四十五年四月廿八日印刷
明治四十五年五月一日發行

發行兼編輯人　東京市麹町區三番町四十一番地　エー、シー、マクドナルド
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

宮川經輝先生の著

靈的實驗

定價 上製七十錢 並製五十錢
郵稅 八錢

昨年の夏、著者は攝州有馬に遊ばれて、自然美を通じて、天地の大靈に觸れ、且つは平素著者が、新約智慧の經典とよぶコロサイ書を繙いて、基督の靈智を思索し、感興は津々としてつきず、そこて筆を把て、說教の草稿、十有四をえられたのです。そのインスピレエションの賜が即ち本書です。

星野行則君著
日本興業銀行總裁添田壽一君題字
三井銀行常務取締役早川千吉郞君序

見學餘錄

定價 七十錢
郵稅 八錢

本書ひとたび世に出てましてからは、各新聞をはじめ、各雜誌は筆を揃へて、讃賞しました。是は全く著者が書くべきものが有て、書いたのに因ると存じます。著者は文士ではありません、少壯の紳士です、趣味の豊かな紳士です、昨年東洋から米國、ヨオロッパ諸國を遍歷された、その紀行です。

發行所 東京京橋銀座 警醒社書店 (振替東京五五參番) 支店は本鄕の春木町

英國劍橋大學教授ソオレイ氏著
マスタア・オヴ・アアツ 千葉掬香譯

輓近倫理思潮の傾向

定價 壹圓
郵稅 八錢

松村介石先生著

△婦人のかゞみ 定價 三十錢 郵稅 四錢

△婦人の心得 定價 三十錢 郵稅 四錢

內村鑑三先生著

△宗教坐談 定價 三十錢 郵稅 四錢

△傳道の精神 定價 二十錢 郵稅 四錢

植村正久先生著

△信仰の友 定價 三十錢 郵稅 六錢

△靈性の危機 定價 四十錢 郵稅 六錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治四十五年五月一日納本發行(毎月一回一日發行)

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN.

Meiji no Joshi

Volume. IX *May 1912.* *No. 5*

A Pilgrimage of Thought. — Miss Miyo Kobashi.

The Mother of To-Day. — Professor R. Nakajima.

A Peep at the World. — Rev. M. Uemura.

Christ's Estimate of Women. — Rev. T. Miyagawa.

Social Reformation and Children. — Mr. I. Abe.

Memories. — Mr. T. Shirai.

Student Foyer in Geneva.

Sacrifice. — Miss Ume Yoshida.

Christ in the "Revelation of St. John — Rev. E. Kashiwai.

YESHUDAS, An Indian Story (Continued). Miss. A.M. Small.

Translated by Miss Matsu Okonogi.

The Official Organ of the National Committee of Young Women's Christian Associations of Japan

(東京神田美土代町三番會發行)